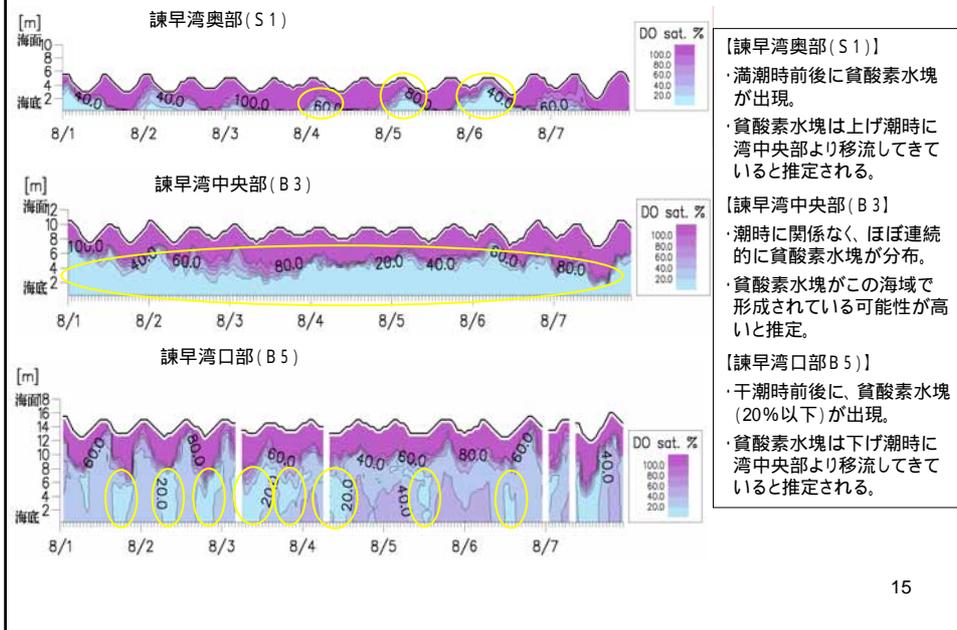
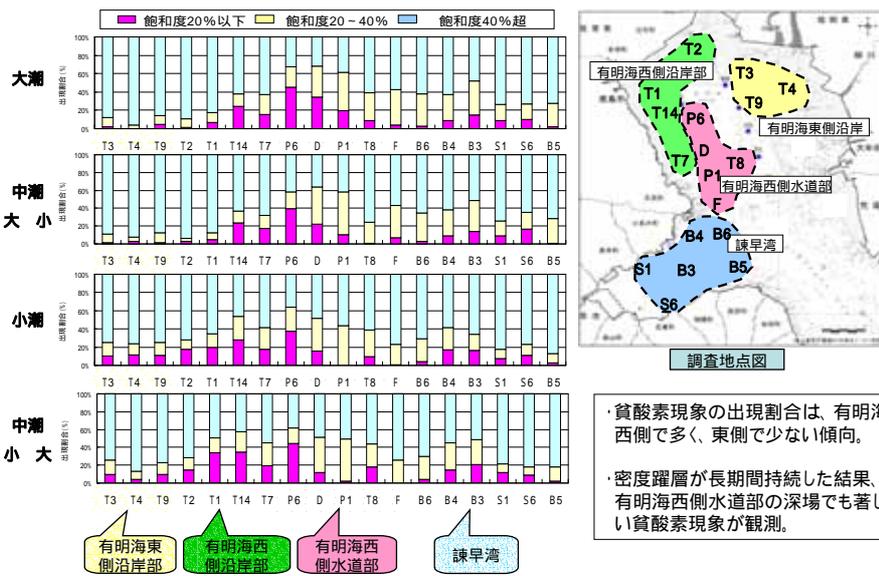


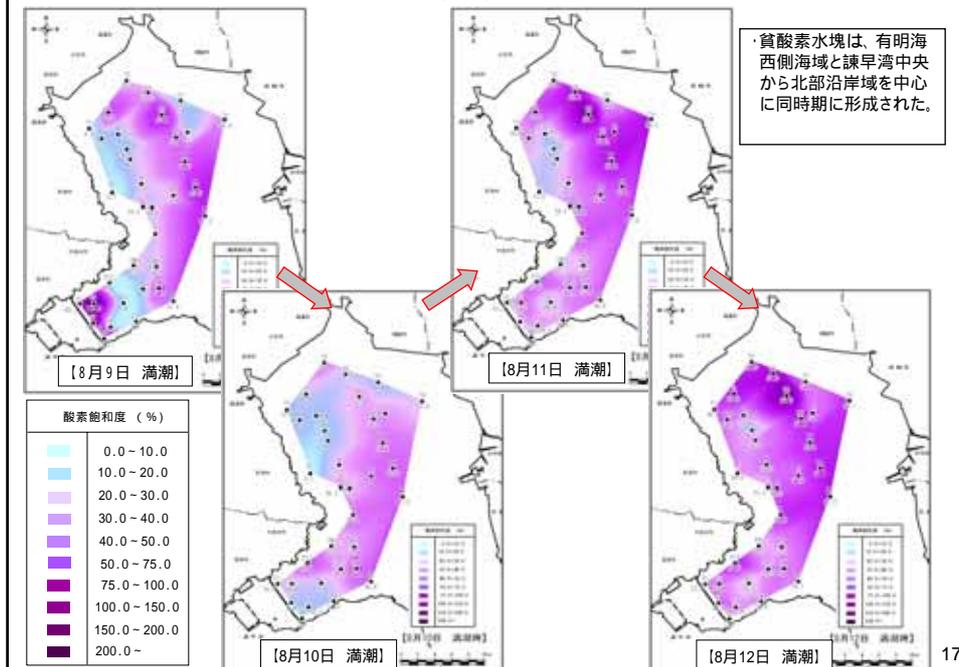
## 諫早湾内における貧酸素水塊の移流状況(2006/8/1~8/7)



## 地点別・潮期別貧酸素水塊の出現割合(平成18年6月1日~9月30日)



### 底層付近における酸素飽和度 (%) の平面分布 (平成18年8月9日～12日)



17

### これまでの調査からわかったこと

- ・貧酸素水塊は、密度躍層の発達とともに形成され、大潮期を超えて継続していたが、台風等による鉛直攪拌により解消された。
- ・塩分躍層は、降雨に伴って発達し、密度躍層の形成に大きく寄与していた。
- ・有明海奥部では、西側沿岸部を中心に貧酸素水塊が形成され、下げ潮時(南流)に南下し、上げ潮時(北流)に北上していることが確認された。
- ・諫早湾では、湾中央部で形成された貧酸素水塊が、上げ潮時(西流)には湾奥部に、下げ潮時(東流)には湾口部に移流していることが確認された。

### 平成19年度の調査方針

- ・引き続き、密度躍層と貧酸素水塊の形成状況を調査し、気象・海象などとの関係を把握する。
- ・貧酸素水塊が頻繁に形成される海域では、プランクトンの死骸の沈降や懸濁した有機物の巻き上げ等により酸素消費量が大きいと考えられることから、底泥の酸素消費速度等の調査を実施する。

18

## 2. 潮流調査

19

### (目的)

有明海の流動現象の実態把握と、潮流変化の要因分析

### (平成18年度調査)

平成17年に調査した15昼夜連続観測データと国土交通省、有明海関係4県等から入手した水温、塩分、河川流量及び風力等のデータを国調費モデルに入力し、有明海の流動をシミュレーションした。

### (平成17年調査内容)

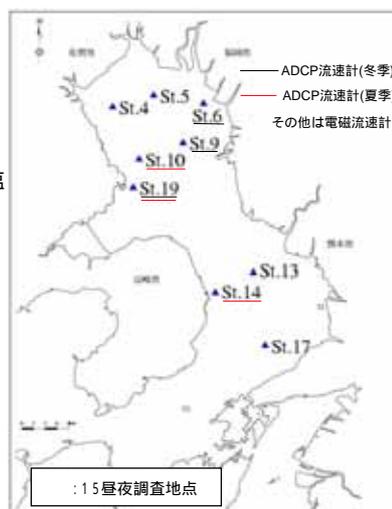
流速計により流向、流速を観測

9地点に流速計を設置し、15昼夜の連続観測

冬季：平成17年2月19日～3月5日

夏季：平成17年7月16日～30日

平成17年潮流観測地点図



20

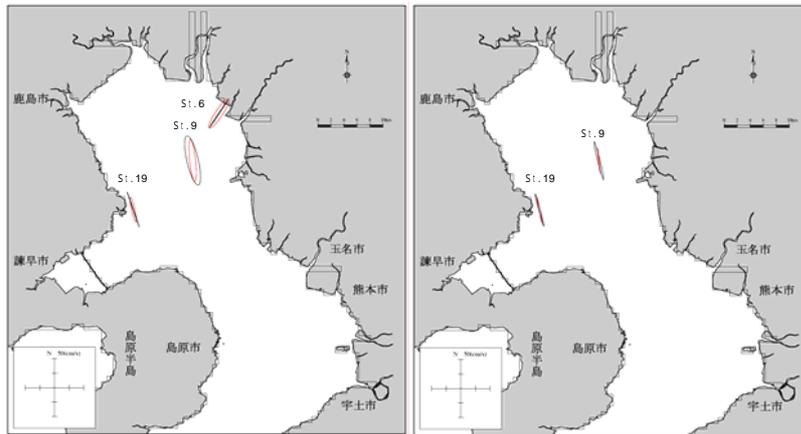
平成17年に実施したADCP(超音波流速計)による潮流調査の観測値と、国調費モデルの計算値のM2分潮潮流楕円とを比較したところ、海底地形が変化に富んでいる測点では、計算結果にやや大きい傾向がみられるものの、概ね一致した。

観測値と計算値のM2分潮の潮流楕円比較(平成17年冬季)

(赤:観測値、黒:計算値)

【第1層:0.0~3.5m】

【第4層:5.5~6.5m】



観測値と計算値のM2分潮の潮流楕円比較(平成17年冬季)

(赤:観測値、黒:計算値)

【第7層:8.5~9.5m】

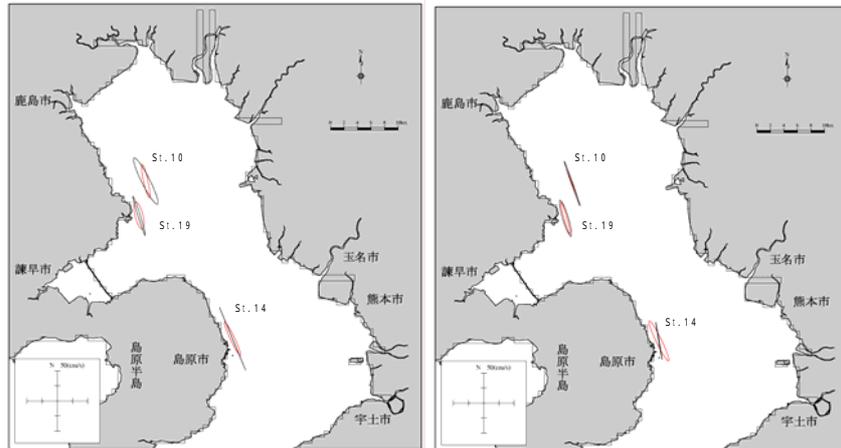


観測値と計算値のM2分潮の潮流楕円比較(平成17年夏季)

(赤:観測値、黒:計算値)

【第1層:0.0~3.5m】

【第4層:5.5~6.5m】



観測値と計算値のM2分潮の潮流楕円比較(平成17年夏季)

(赤:観測値、黒:計算値)

【第10層:12.5~15.0m】

